

情報教育におけるプレゼンテーション指導

－ブシュケ・ネットにおける実践例からの一提言

[URL/e-mail]

http://www.aoni.waseda.jp/akiokada/

http://www.waseda.jp/assoc/inochi/

e-mail: akiokada@u01.gate01..com

はじめに

筆者は、Table1 に示すごとく早稲田大学を中核として8箇所の大学で担当している医事法学や情報処理関連科目をネットワークで統合し、ホームページやメーリングリスト等を活用して授業を展開している。また時には「学生シンポジウム」等を開催し、日頃はネット上で交流する学生たちが大学の枠を超えて一堂に集合する。さらに学生たちが自発的にネット上に編集部を組織し、授業のテーマである社会現象としての医療に関するメールマガジン「ブシュケ・マガジン」を発行している。これらを通じて、さながらネット上に浮遊する学校を体感できるような授業運営に取り組んでいる。この授業ネットワークは「ブシュケ・ネット」と命名され今日に至っている¹。

大学	科名	学年	形態	単位
早稲田	情報基礎	全	講義	2
一橋	情報基礎	1	講義	2
明治	情報基礎	全	講義	4
東亜	法学	1	講義	4
慈恵	法学	2	講義	16h
大東	情報概論	全	講義	4
関東	情報ロジック演習	1	講義	4
東横	プレゼン演習	2	講義	4

Table1 担当科目

一 概

筆者がブシュケ・ネットの授業を開始したのが2000年であるが、その当時に比して現在、基礎的情報教育において、その重要性の認識が顕著に増加した単元がプレゼンテーション・スキルである。筆者が授業を担当する各大学の最近のカリキュラムを一瞥しても、年間の半期をコンピューティングを基礎としたプレゼンテーション・スキル指導に充当する大学ⁱⁱ、プレゼンテーションに特化した情報科目を設置する大学ⁱⁱⁱ、あるいはグループワークとプレゼンテーション指導を情報教育の中で重要単元と位置づけている大学^{iv}が見られる。このようなプレゼンテーション指導の重要性認識の背景には、第一に、情報教育が大学における学問方法論として指導されるべきであるという教員側の認識が高まってきたことがあげられよう^v。すなわち情報技術を各自の学問に応用する方法を指導していく場合、最終的に辿り着く問題として、学問成果を社会へ還元する方法としてプレゼンテーションをどう実施するかという指導がある。第二に、学生のプレゼンテーション・スキル向上への実社会からの要請が挙げられよう。すなわち企業労働等において、プレゼンテーション・スキルの重要性が顕著に高まっているということである。これについては筆者が、直接企業側からそのような話を聞く機会が増え、

また就職した卒業生からプレゼンテーション・スキルを筆者
早稲田大学メディアネットワークセンター
岡田昭夫
新宿区戸塚町1-104 03-3203-6301

の授業でしっかり学べたことへの感謝が頻繁に寄せられることから明らかである。

他方、この分野の指導には2つの困難性が伴うことを認識しなければならない。すなわち、第一に、指導方法が確立されていないことである。筆者は2002年度の文部科学省・東京大学主催の情報処理教育研究集会において、情報教育におけるプレゼンテーション指導の一基準を提言したが^{vi}、現在に至ってもこの分野での指導基準は全く確立されておらず、指導担当者が手探りで進めている状態を脱していない。第二に、プレゼンテーション・スキルの指導は、情報テクノロジーの分野のみでは全くできないという大きな問題が存在している。すなわちコンピュータを用いたスライド作製力のみでは、優れたプレゼンテーションは実施できない。イベントとしての構成力から言葉の発し方や視線の配り方に至る総合力が必要とされるのである。それ故、担当教員が本格的な指導を逡巡してしまうことが多く見受けられる。

前述のごとく、筆者が前回プレゼンテーション指導の提言を試みてから4年が経過しようとしている。その間、プレゼンテーション・スライドを作製するアプリケーションは大きな進化を遂げた。それに追従してプレゼンテーションの展開にも新たな趨勢が生まれてきた。そこでこのような状況を背景に、本稿において、今一度、新しいプレゼンテーション指導の方法に関する提言を試みたい。

[1] ブシュケ・ネットの情報教育におけるプ

レゼンテーション指導の位置づけ

①研究成果を社会に還元するメディアとしてのプレゼンテーション

筆者のブシュケ・ネットにおける情報教育は、各学生の大学における学問活動への情報技術の応用力の涵養に主眼を置いている。いわば教養基礎演習としての情報教育を標榜している。具体的には、医療問題を課題として提示し、情報技術を駆使してその研究活動を行う過程で、情報技術のアカデミズムへの応用力を涵養していくのである。そして、課題研究の成果がある程度あがった段階で、学問成果を社会に還元するためのメディアとしてWeb Pageの作成とプレゼンテーションの実施を行わせている。

医療従事者を目指すわけではない一般大学の学生たちにとり、医療問題を考える機会が殆どなく、それ故であろうか、課題研究が進捗するにつれ、「命」をめぐる諸問題の重要性に気づき、研究成果を社会に知らしめていきたいという希望が高まっていくようである。それゆえ、研究成果を公表するためのメディアを駆使する技術の習得には強い意欲を示す学生が多い。

②本番としての「最終プレゼンテーション」の実施

上述のごとき学生たちの問題意識の発露として、筆者の授業では、学期の最後に最終的な研究成果の発表会として「最終プレゼンテーション」を実施している。これには可能な限り学内で各種学会等を催行する際に用いられる会議場等を使用する。また、また当日は誰でもが聴取可とし、学内外を問わず多くの人々の参加を呼びかけている。特にプッシュ・ネットで筆者の授業を履修している他大学の学生たち、課題研究で指導くださった医療機関の方々等が参加されることが多い。

また、各年度に1度ないし2度、早稲田大学で会議場等を借用してプッシュ・ネット・シンポジウムを開催している。これには筆者の授業を履修するすべての大学の学生たちを、課外授業として一堂に集め、前年度の履修者のうち優秀なプレゼンテーションを行った学生を招聘し、実際にそのプレゼンテーションを聴取することで、自らのプレゼンテーション・スキルを向上せしめる機会としている。また同時に、医療の各分野の専門家をも招聘し、実際の医療現場の様子をうかがう機会ともしている。

③全人的活動としてのプレゼンテーション

上述のごとく、プレゼンテーション・スキルの巧拙は、情報技術のみで決定されるものではない。そこで筆者の授業においては、まず情報技術の観点から、後述のコンピューティングの実現を重視している。しかしながらそれ以外に、プレゼンテーション全体の構成等のプロデュース、プレゼンターの個性に調和した話術や所作の指導等、情報スキルを超えた部分の指導をできるだけ細やかに行うことを心がけている。

[2] プレゼンテーション指導の留意点

(1)アプリケーション相互の連携

筆者の授業では、Web Page の作成において、まず Microsoft Word を用いている。そしてある程度 Web の骨子が出来た段階で、Html の文法に取り組むようにしている。こうすることで、初心者の多い授業では、Web Page 作りに親しみながら、実はワードプロセッサでの文書作成方法をも知らず知らずのうちに修得させることを目標にしている。

そして Web Page 作りがある程度進捗した段階で、Power Point の授業を始めると、使い慣れてきた Microsoft Word と共通の使用人が多い故に、学生達はものの数十分程度で Power Point の使用方法の概要を身につけてしまう。そしてそれが容易に取得できたことに自信を深め、他方、課題研究の進捗で人々に伝えたいメッセージや問題意識を醸成してきているので、プレゼンテーション技術の習得に強い興味を示すのである。

(2) コンピューティングの実践

コンピューティングの概念は、「コンピュータを活用した知的活動」と位置づけることができよう。すなわちコンピュータは人間の知的活動の可能性を広げている。それ故、コンピューティングを、人間の知的活動を補強する方法論と理解することができる。そうであるとするならば、既存の難解な医療や医事法上の概念を、あるいは医療事故の事実関係を、デジタル技術を用いて画像化や図式化することによって

平易なスライドとすることもコンピューティングの一環と言えよう。

そこで筆者の授業では、既存の理論や事実関係を、聴衆が平易に理解できるよう図表を作成し、それによって所与の事例を説明するトレーニングを重視している。授業では、「事例の図式化」という単元を設け、画像処理技術やスライド作成技術を用いて、筆者が提示する医療事故の事実関係等を、わかりやすく図式化して説明する訓練をおこなっている。これにより学生たちは、後述のごとき「読ませず見せる」スライドの製作へ意を注ぐようになる。

(3) 多回数の実施

学生にとって、プレゼンテーション能力は、演習授業等における研究報告、就職活動、就職後の職能等、多くの場面で必要とされる。しかしながら前述のごとく、その能力の涵養には情報技術のみならずその学生の全人的能力が大きく関わっている。そこでの確にその能力を身につけるには、自分の個性を見つめるところから始めなければならない。それが自分らしいプレゼンテーション・スタイルの確立につながっていく。そのためには、プレゼンテーションの回数を経験し、その過程で自然に自分らしさを見いだしていくことが必要になる。

筆者の授業では、プレゼンテーション・スキルの修得の段階にはいると、所与の医療問題ごとに分けられた課題研究ごとに、一週間に行った研究活動を報告するプレゼンテーションを毎週実施する。これにより試行錯誤を繰り返しながらスキルを向上させていくのである。

(3) 学生による相互評価

学生達が毎週行う上述のプレゼンテーションは、一班3分程度の持ち時間で行う。そして各班のプレゼンテーションが終わった後は、筆者がスライド作成技術や医療に関する実体的事項の助言を行っている。

学生達は、他班のプレゼンテーションを聴取する間、各自の PC 端末から授業用メーリングリストを用いて、すべての班に対して感想を送信する。すなわちクラス全員が、互いにプレゼンテーションを評価し合うのである。これにより、学生たちは今週の自分たちのプレゼンテーションの巧拙を知ることになる。彼らは、クラスメートたちの感想に非常に敏感である。それ故、これらの感想を基に、自分たちのプレゼンテーションに改良を加え、次回のプレゼンテーションに臨むのである。例えば、「先週のプレゼンの感想に、『スライドに字が多すぎる』という指摘があったので、今週は字を減らしてみました」という如く、次回のプレゼンにクラスメートの指摘をしっかりと生かす努力を怠らないのである。以上のごとく、学生によるプレゼンテーションの相互評価は、指導上極めて有益と言える。

[3] 指導上にあたり学生に強調する点

上述のごとき理念と方法論に基づいて筆者はプレゼンテーション指導を行っているが、ここでは、学生が実際にプレゼンテーションをプロデュースし実施する際に、会衆の印象に残る良いプレゼンテーションを実施するコツとして、筆者が学生に強調している諸点を紹介したい。

(1) 読ませず見せる

コンピュータを用いたスライド・プレゼンテーションの本質的特徴は、前述のごとく、視覚的にコンピューティングを実践する点に見いだされよう。既存の複雑な理論や事例を様々な図表やアニメーション効果を用いて、平易に解説できる点に、その優れた特徴があると言えよう。従って可能な限り、画像化・図式化によって会衆の理解の補強を計るべきである。

各種学会や研究会等に於いて、文字を多用したスライドをしばしば見ることがある。しかしプレゼンターが、それら多数の文字の読破を会衆に強要すれば、逆に会衆の集中力を殺ぎ、理解を補強するどころかそれを阻害する結果になりかねないことを認識すべきである。

そこで筆者は、一枚のスライドに用いる文字数は、一瞥で理解できる量を超えないよう指導している。表題の「見せろ」とは、この一瞥で理解できる文字量を意味している。

(2) プレゼンのテンポを大切にしろ

各種学会や研究会等において、しばしば遭遇する難解なプレゼンテーションの原因のひとつに、スライドに提示された文字の情報量と、口頭での言葉による説明の情報量との大きな乖離という問題がある。

すなわち一枚のスライドに書かれた文字情報量を遙かに超えた長大且つ詳細な説明を口頭で行うという問題である。

この場合、もはやスライドは理解の補強という機能を果たし得ず、会衆はひたすら聞き取りによる理解に務めなければならない。当然のことながらスライド交換のテンポは冗長になる。この冗長なテンポと、耳からのみの情報は、会衆の理解を深刻に阻害する結果となる。

逆に、スライド交換がメリハリのあるテンポで行われているということは、スライド上の文字情報量が適切であり、それに見合った量の情報が口頭で提供されていることを意味する。

またスライド映出の時間が常に均一で延々と一定のテンポを刻み続けるのも、会衆の集中力を阻害することになる。たとえば各スライドの映出時間がすべて2分で、合計20枚のスライドが同じテンポで延々と繰り返されることを想像すれば、そのようなプレゼンテーションに集中することの困難さを容易に理解することができるであろう。プレゼンテーションの起承転結や、会衆に新鮮な印象を与えるため、目的等により、例えば2分間映出し続ける必要のあるスライドもあれば、10秒も見せれば充分なスライドもあるはずである。このように内容に則して、スライドの映出時間に的確な変化を持たせメリハリをつけることが、会衆の集中力を維持する上で重要である。

筆者は学生たちにこのことに気づかせるため、テレビドラマや映画のカット割りを参考にしよう指導している。すなわち各自のお気に入りのテレビドラマや映画を見る際に、ストップウォッチを用意して、ひとつひとつのカットの長さを測らせるのである。それによって、例えば10秒間という長さのカットが何カットも連続するなどという編集があり得ないことに学生が気づくのである。このような経験は、学生がプレゼンテーションの構成を考える際に大いに役立つようである。

(3) 最初の1枚で成否が決まる

会衆があるプレゼンテーションに集中力を傾注するか、し

ないかは、そのプレゼンテーションの第一印象に大きく左右される。プレゼンテーションの冒頭で会衆の興味を刺激できれば、ある程度の間、会衆を集中せしめることが可能である。

特に学会報告から学生の研究発表会に至るまで、ひとつの会合で複数のプレゼンテーションが順番に行われることが殆どである。そのような場合、自分の順番が、例えば後半で会衆の集中力が途切れはじめているような場合、自分のプレゼンテーションに会衆を集中せしめるには、鮮烈な第一印象を与えることは非常に効果的である。もちろん、第一印象で会衆の興味を惹き付けることができても、その後の構成や演出、そして何より内容が稚拙であれば、その後の会衆の集中を阻害してしまうのは言うまでもない。

このようにプレゼンテーションの冒頭で、鮮烈な印象や好印象を与え、会衆の興味を惹き付けるためには、プレゼンテーションの演出力・構成力を涵養する必要がある。まさに情報処理技術のみでは如何ともしがたい部分である。

プッシュ・ネットの各授業の学生たちは、上述のごとく授業の中で多回数のプレゼンテーションを実施する過程で、冒頭で会衆の集中を勝ち取るために、試行錯誤を繰り返し以下のごとき、有効な方策をみだしている。

① オープニング・スライドの完成度を可及的に高める

これは、極めて順当な方策といえよう。冒頭のオープニング・スライドの美的完成度を可能な限り高めることで、そのプレゼンテーションに会衆を惹き込んでいくという戦略である。しかし、それに傾注する労力がどの程度の効果をもたらすかは全くの未知数と言わなければならない。

② プロローグの導入

プレゼンテーションの主題に関して、新鮮なあるいは衝撃的な印象を与えるプロローグを作製する。特に最近では、プレゼンテーション・ソフトの機能向上を反映して、フェード等の効果を利用し、且つ音声をも導入して主題に関するイメージフィルムのごときプロローグを作製する学生が増えた。会衆は、登壇したプレゼンターはすぐに話し始めるという予断を持っているので、プレゼンターが冒頭で、言葉少なに、主題に関するプロローグを上映し始めると、その意外性も手伝って、自ずとプレゼンテーションに惹き付けられていくようである。

③ 複数回のプレゼンを通じて認知度を高める

これは、定期的に複数回のプレゼンテーションを実施する場合に有効である。例えば自分のプレゼンテーションの主題を象徴するロゴを作製するか、自分たち自身の映像を撮影し、あるいは、自分たちのイメージキャラクターを創作して、その画像に画面上で毎回のプレゼンテーションで説明を行わせる。そして毎回のプレゼンテーションを通じて、すこしずつ、視覚的に会衆に自分の存在を認知させ定着せしめる方法である。ただし、毎回会衆の期待に応えられるだけの内容や演出を盛り込むことができなければ、自分の存在が認知されているだけに、登壇しただけで逆に会衆が「そっぽを向く」という事態が惹き起される危険性もある。

(4) 読まずにしゃべれ

プレゼンテーションを実施する際に、朗読原稿を用意することは一般的に行われている。しかしながら、学生による多くのプレゼンテーションを聴取して、そこから確信をもって

言えることは、プレゼンターが自らの言葉で語りかけるプレゼンテーションの方が好意的に受容されているということである。

朗読によるプレゼンテーションを行うということは、原稿を注視して、会衆の状態を把握することなく、プレゼンターの一方向的なペースで行われることになりやすい。しかしながら、プレゼンテーションを実施する際は、会衆全体に目配せを行いながら注意を払うことで、その集中力や疲労の度合いを的確に把握し、それらに合わせて話題を変える等の気分転換を織り交ぜる等の臨機応変さがなければ、畢竟会衆の集中力を阻害し、印象に残らないプレゼンテーションで終わってしまうことになる。

その意味では、語りかけるプレゼンテーションを試みるということは、上述のごとき会衆本位のプレゼンテーションを目指す第一歩と言えよう。

また、近時、教職課程の履修にあたり必修科目であるという理由で、情報教育科目を履修する学生が増えた。上述のごとき会衆本位のプレゼンテーション・スキルは、教師の指導スキルの基本であり、教科教育法や教育実習に通じる部分である。かような事情もあり、筆者のプレゼンテーション指導の中では、学生たちに語りかけるプレゼンテーションに取り組むことを求めている。

(5) 会衆を巻き込め

会衆の集中を端的に獲得するために有効な方策は、会衆をプレゼンテーションに参加させてしまうことである。例えば、所与のことがらに関する感想を聞く、会衆の中の特定の数人に無作為に質問をして回答を求める、会衆全体に質問を発し、該当者に挙手を求める等である。個々の会衆に一定の動作を求め、それに応じさせることで、プレゼンテーションに参加せざるを得ない状況を作ってしまうのである。

上述のごとき具体的方法以外にも、学生たちが考案した会衆参加型のプレゼンテーションには次のようなものがある。

① 会衆にイニシアティブを与えたプレゼンテーション

例えば、プレゼンテーションの中で説明すべき項目が3つあるとする。それら3項目を簡略に提示したスライドを映出しておく。そのスライド上の各項目には、それら項目を説明するスライド群とハイパーリンクが設定されている。そしてプレゼンターが無作為に会衆から指名し、その3項目の内どれに興味があるかを質問する。そして回答された項目を、スライド上でプレゼンターがクリックすると、その項目を説明するスライド群にジャンプするという方法である。

ハイパーリンクを応用した、単純な演出である。通常、会衆参加型のプレゼンテーションというと、質問に答えさせる、感想を聴取する等、会衆はあくまで受動的立場で参加するにとどまる。しかしながら、この方法では、項目を選択するという行為を通じて、プレゼンテーション展開のイニシアティブも会衆に与えてしまうということが可能となるのである。

② 会衆の反応を説得力として利用する

たとえば、強い個性的な味のする食材を説明するプレゼンテーションを行う場合、会衆から無作為に数人を選び演壇に上がらせ、試食させる。その際の表情を、カメラ経由でスクリーンに映出する。そして試食の感想を聴取する。

すなわち中立的な会衆から体験者を選ぶ故に、他の会衆はその反応に興味を示す。そのため、それらの人々の反応は、

会衆に対する強い説得力として機能するのである。

(6) 実物にまさる説得力はない

筆者の展開しているプッシュ・ネットの授業では、医療問題を課題として、それらの研究を通じて情報技術の学問への応用方法を涵養することを基本方針とする。それを実現するため、見学や指導等を通じて授業を援助してくださる医療機関も多い。多くの学生たちは、医療問題に関しては、それまで取り組んだことのない初学者である。分からないことからは、上記のごとき連携関係にある医療機関に連絡を取り、その現場を見学し、あるいは医師や看護師に話をうかがい指導を受けることができる。かような経験は、学生たちへの強い動機付けとなり、より熱心にその後の研究に取り組んでいく。このような本番で受けた刺激は、プレゼンテーションにも有効に機能している。例えばホスピスについて文献を収集し、それを基にスライドを作成しプレゼンテーションするよりも、自分が実際に現場を訪問して、その取材報告をする方が、自分の体験に基づいて自分の言葉で報告できるので、会衆にも強い印象が残るといえることである。

当然の事ながら、このような実地見学を行うには、当該医療に関する周到な事前学習が必要のみならず、患者の人権や患者および医療者の個人情報への詳細な配慮を必要とする。それらの事前準備を行った上、今までのところ例えばホスピス、救命救急、移植医療の現場、臨床研修指定病院での研修医の取材、重篤な脳梗塞患者と家族への取材、人工妊娠中絶経験者への取材等が行われた。

学生たちは現場を経験すると、そこで得た問題意識を会衆に伝えることを希求する。それが、プレゼンテーションでの彼らの言葉により強い説得力を与える。あるいはそこで撮影した写真や、ビデオは会衆の理解への補強として極めて良く機能するのである。それ故、筆者は「本番で学ぶ」ため外へ出ることを強く奨励している。

おわりに

冒頭でも述べたように、情報教育において、プレゼンテーション指導の重要性は日に日に高まっている。この分野において、指導の実践報告や指導法の提言それをめぐる論議が、今後活発に行われなければ、社会的期待に応えることが出来なくなってしまう。全人的指導が必要故に逡巡もあろうが、情報担当教員のこの分野への積極的取り組みが期待される。

ⁱ 今日に至るまでの筆者のネットワークによる授業統合の展開過程については拙稿「遠隔授業の代替機能とその限界に関する一考察」(『コンピュータ&エデュケーション』Vol.14pp.51-56、柏書房、2003年6月)注1を参照されたい。

ⁱⁱ 筆者の担当する中では明治大学の「情報基礎論」がこれにあたる。指導のミマリクワイアメントとして、本文のごときプレゼン指導が強く要請されている。

ⁱⁱⁱ 筆者が担当する中では、東京情報大学のプレゼンテーション演習等がこれにあたる。プレゼンの実習のみに26コマ程度を充当できるので、情報スキルのみならず全人的指導を十分に行うことができる。

^{iv} 筆者の担当する中では早稲田大学の情報基礎演習がこれにあたる。グループワークを前提とするプレゼンテーションの指導をミマリクワイアメントとして強く要請している。

^v 拙稿「ゆるやかな遠隔授業から見た『教育の情報化』と『情報教育』の到達点」(『コンピュータ&エデュケーション』Vol.17pp.18-28、柏書房、2004年12月を参照されたい)。

^{vi} 拙報「当世風学生プレゼンテーション」(2002年10月 平成14年度情報処理教育研究集会、文部科学省・東京大学主催、於東京大学)